草原の歌に花言葉を

かがみ豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
草原の歌に花言葉を

【Ｎコード】
Ｎ６２７３Ｗ

【作者名】
かがみ豆腐

【あらすじ】
自らの意思により、奴隷としての環境から逃げ出すことに成功したカルル。彼は王都を目指して草原を渡ろうとするが、その途中で狼に襲われてしまう。
そんな窮地に現れて救ってくれた者が居た。騎士はアカシアと名乗り、王都の追っ手から逃れるために荷馬車を貸してほしいとカルルに懇願する。
助けられた礼と、さらに幼き日の再会に感激したカルルはそれに快諾するが、それはつまり逃げ出してきた村をもう一度通りかかると

いう意味でもあった。
しかし引き返してきたカルルたちが目にしたのは、焼け跡と化したかつての村だった……。

序章（前書き）

だれだって幸せになりたいのです。奴隷も、英雄も。
そのために逃げて、時には戦います。
それぞれが理想を求めて現実に立ち向かうのはどこの世界も変わりません。
これも、そんな大海の中の一つのさざめきのような物語です。
誤字、脱字、わかりにくい描写や比喩表現など、おや？　と感じられた部分がありましたら指摘して頂けると幸いです。

序章

痛いほどに冷たい雨が降っていた。
そのおかげで人目はなく、家から出る者がいないのは幸いであった。誰にも見られたくない。
長い付き合いだった手枷は、足元に倒れる男の持っていた鍵束で外れてくれた。
家から運び出した荷物を手早く荷馬車に積み込むと、彼は長年世話をさせられてきた馬に囁きかけた。
「逃げ切れると思うかい？」
ぶるる、と馬は嘶いた。彼が喋ると必ず相槌を打ってくれる。
「……行こうか」
彼が軽く手綱を打つと、ゆっくりと木の車輪が回り始めた。

草原の出会い

緑の海。……と言うそうだ。実際の海を見たことはない。
見渡す限り、視界には草原がどこまでも広がっている。
肌を焼く日差しは暑いくらいだが、風がなんとも心地よく吹いている。秋は近いらしい。
緑色をかき分けた目の前の一本道は朝からずっと変わらないが、景色の中で太陽だけが段々と低くなってきていた。
自分がいなくなったことで、今ごろ村は大騒ぎだろう。
だが、もうそんなことはどうでもいい。あんな村に縛られることがなくなり、ようやく自分は自由を手に入れたのだから。
ふと、空を仰ぐ。
青と白だけの空を、こんなにも美しく綺麗だと感じたのはいつ振りだろうか。
その天井が赤みを帯び、太陽が地平の境に沈んでからはあっという間に気温が下がり始めた。
――そろそろ夜の準備をしたほうがいいのだろう。
なにぶん旅は不慣れなのだ。漠然とした不安があってなかなか気楽にはなれない。
こんな時にはどうする、程度の知識があるだけで、具体的な経験というものはまったくない。
「冷えこんできたな……」
苦労してようやく火がついたころには、もう空と雲の判別が怪しいくらいにまで暗くなってしまっていた。
「これだけだもんな……。さすがに心もとないよなぁ」
一頭の馬が余裕を持って引ける大きさの荷馬車。これにカルルのすべての持ち物が積み込まれている。
干した肉とライ麦の黒パンを齧って腹を満すと、カルルは毛布を掴んで荷台に上がり、寝転がって星空と向きあった。

「綺麗だ……」
それ以上の言葉はなく、そういえばと体を半分起こした。
「火、大丈夫かな。離れてるから燃え移りはしないと思うけど……大丈夫だよね」
焚火の火は獣除けになると聞いたことがある。薪はこの草原では貴重だが、なるべく火は絶やさないほうがいいだろう。
また横になって目を閉じた。すると耳が冴えるのか、風の音も普段より聞き分けられるような気がした。
「……？」
今のは何の音だ？
風の音にまぎれて一瞬、何かを感じた。音ではなかったのかもしれない。
再び体を起こし、月明かりしかない薄暗い草原を見渡した。
「……気のせい、かな」
結局何も見つけられず、やがて睡魔に負けてカルルは深い眠りに就いた。

「……？」
今の音はなんだろうか。
さっきも同じようなことがあった気がする。
だが、確かに今しがた、獣の鳴き声のような……。
――強く砂利を踏む足音。
次いで、獣の悲鳴。
「――っ！」
カルルは跳ね起き、周りを見た。
誰かが、誰かの背中が見える。暗くてよく見えないが、何をしているのかはすぐにわかった。
ようやく目が暗闇に慣れてくると、三頭の狼がそこにいた。頭を低くし、唸り声をあげてその人物を遠巻きに威嚇している。

自分なら早々に腰が抜けてしまう状況なのだが、その後姿の人物は臆することなく凛と拳を構えていた。怖くはないのだろうか。
そして、あっという間もなく一頭の狼が飛び掛って――と思った時には、すでに引いていた拳でその鼻先を迎え撃っていた。
――すごい。
思わず見惚れていた。
しかし次の瞬間に別の狼が襲い掛かり、その者の太ももに獣牙を喰いこませた。
「――っ」
好機とばかりにもう一頭も続き、わき腹にぶらさがるように食らいつく。
悲痛な声に我に返ったカルルは、何か武器になりそうなものはと荷台を見渡し、それを見つけた。
長剣。
護身にとカルルが前の家から持ち出したそれ。未だろくに素振りすらしたことがなかった。
……だからと言って、いざ実戦となるとこんなにも重く感じられるのだろうか。
これを持って野生の狼に挑み、その毛皮を切り裂き、肉を断つ。
怯えているのが自分でもよくわかる。
怖い。狼は怖い。そんなのと命を懸けて戦うのはもっと怖い。自分はなんと臆病なのだ。このままでは……。
「――――っ！！」
その結果にこそ、カルルは一番恐怖を覚えた。
「……う、……わあああぁぁぁっ！！」
暗闇で鈍く光る長剣を握り締め、荷台を飛び下り、地面を蹴った。そしてすぐにその瞬間は訪れた。
突然の雄叫びに狼はカルルの存在に気づいたが、獣の性か簡単には咬みついた顎を離そうとはしなかった。獣の黄色い目がぎょろりと彼を睨み付けるが、それに怯むほどの思考の余裕はもう残ってい

ない。
――たとえ剣としては使えなくても……！
ドゴッ、というどちらかといえば打撃のそれに近い音のあと、足に咬みついていた狼が白目をむいて倒れた。
まさか本当に倒せるとは、とカルルが驚いている数秒の隙にもう一頭の狼は離れてこちらの様子を伺っていた。
「……っ、君……」
「え？」
よく通る、澄んだ声だった。それ以上の感想を述べることに意味はなく、狼に目を向けたまま返事をした。
「だ……大丈夫ですか？」
大丈夫なわけがないだろう、とわかっていたがそう言うしかなかった。
カルルから詰めれば二秒か、狼からなら一瞬で詰められるであろう間合い。
不意打ちならばともかく、まともにやりあって勝てる可能性などない。
「くそ……」
「剣を――」
「え？」
「剣を。私に」
その騎士はいつの間に隣に立っていたのだろう。
ちょうどその時、すぅと月の光が雲の隙間から闇の中へと注いだ。
その美しさに子供のころに見た天使が光の中から降りてくる絵を思い出す。
淡い月光に映える長い金色の髪。短く切り詰められた甲冑は傷こそ少ないが使い込まれた歴戦の貫禄がある。そしてその凛とした翡翠色の双眸。……美しい横顔だった。
思わず息を呑んだカルルは女性の言葉を忘れてしまっていた。

「剣を。私にまかせてくれ。きっとあれを倒して見せよう」
我に返ったカルルは狼に注意をむけたまま慎重に剣を渡した。
まともに使われたことなどない真新しい剣を見つめて、一言。
「――少年。逃げることを恐れた臆病者のことを、人は英雄と呼ぶのだ」
その時、弾けるように鋭く――狼が跳び上がった。
一瞬の出来事だった。
薄いマントを翻らせ、まるで舞踏でも踏むかのように騎士はそれを真っ二つに斬り伏せていた。
「……私は成り損ねたがな」

夜風に吹かれて

「うむ、美味い」
　さっきの貫録はどこへやら。
妙齢の女性特有の愛嬌に満ちた、至福の表情でそう感想を述べると騎士はまたひと口と狼の肉を頬張った。
聞けば名はアカシアと言うそうで、仕留めた狼の肉をたき火で炙っては口へと運ぶ彼女からはなんとも旅の経験が伺える。
「しかし危なかった。陽が落ちて草原をさまよっていると、遠くに火の光を見つけてな。私がたどりつく前に火は消されてしまったのだが、どうも獣の気配を感じたのだ。放っておくわけにもいかず、というわけだな。君が目を覚ましたのはそれからだ」
　どうやら自分が寝ている間に狼に襲われかけていたらしい。それを彼女が助けてくれたということだそうだ。
「本当にありがとうございます。それと……、――すいません」
「？　どうしてカルが謝る」
「……もっと、……」
　思い返すと情けなくて声がすぼんだ。
「ん？　なんだ」
「もっと早く僕が出ていれば……アカシアさんは怪我をせずに済んだはずです……」
　するとアカシアはふっと鼻から音を出し、水袋からひと口飲んで穏やかな口調で言った。
「カルのせいではない。それに君は私の手当てをしてくれた。それで十分さ」
　小さな鎧の隙間から服を捲し上げるとわき腹が見えた。カルルの着替えを裂いた布が巻かれており、手当てをした時の柔らかい感触が脳裏に甦ったカルルは気恥ずかしくなって目を逸らした。
「ん。どうかしたのか？」

「い、いえ……なんでもないです」
「ふむ……。――カル」
「は、はい」
「君は今、いくつだ？」
「へ？」
「年はいくつなのかと聞いている」
「年……は、十七です」
「私と三つしか変わらないな。君は敬語で話すのに慣れているようだが、もっと堂々としたらどうだ？」
「……そう、ですよね……。気を付けます……」
慣れているのではなく、今までそれしか出来なかった。だがしかしそれを彼女に言っても仕方がない。なにより自分について詮索を受けたくないのだ。
「まあ好きにすればいいさ。ところで」
「はい」
「私も荷台で寝ようと思うんだが……構わないかな？」
豪快な欠伸だった。せめて手で口を覆うくらい、と言っても恐らく無駄なのだろう。
「え……ええ」
「ありがとう。では、話の続きはまた明日な。おやすみ」
一方的に話を切ると騎士は荷台によじ登っておもむろに甲冑を脱ぎ捨て、寝転がるとすぐに静かになった。
「……ふぅ……むにゅ」
悪い人ではないのだろう。……たぶん。
ぱちぱちと燃えるたき火に残っていた木切れをすべてくべ、カルルも眠ることにした。
「でもなぁ……」
それがいくら小さな荷馬車で、多少の荷物が積んであるとはいえ、足を伸ばして寝るのには十分な余裕がある。
だが、そこに二人ともなれば話は別だ。

猫のように身を丸めて横になっているアカシアの隣には、カルルが寝るにはなんとも微妙な隙間が空けてあるのか、……それとも空いているだけなのか。
後者だった場合を考慮すると、ここに無理やり体を押し込むのは流石に遠慮するべきであろう。
「……寝るんじゃないのか？」
不意に目だけ開いてそう言われた。
「……もっと寄ってくださいよ」
「そうか、たしかに冷え込むからな。君がそう言うのならば」
「いや、ちょっと、逆です、そっちに詰めてくれって意味です」
「ああ、そういうことか。……ん、これでいいか？」
「はい。……それで、アカシアさん」
「なんだ？」
「さっきあなたが話の続きは明日って……。でも、明日すぐに出発するつもりなんですけど」
「ああ、私もそのつもりだ」
「いえ、ですから。いつ、その話をするんです？」
「？　道中でゆっくりと話せばいいと思うのだが」
「……ああ、アカシアさんも行先は都の方角でしたか」
「なに？」
「え？」
「王都に行くのか？　カルは」
「え、ええ」
「……まいったな」
のそりと起き上がるとアカシアは頭を抱えた。
「あの……僕が王都に行くとまずいんでしょうか」
「いや。カルではない。私が……。――ふむ、やはり今話し合ったほうが良さそうだな」
話し合い、と言いながらもアカシアの口調と眼つきには穏やかではない色がこもっていた。

英雄

一体、どれほどの敵を切り伏せてきたのだろう。
ずっと生き延びるために必死だった。
自分を殺しに来る敵が、ただただ怖かった。
名も知らぬ相手に剣を振り下ろすうち、いつしか『戦神アカシア』などと呼ばれるようになっていた。
それが使命と信じ込むことで、命を奪うことにすら躊躇しなくなったのはいつからだろう。
……半月ほど前、ある国で権力の頂点だった国王が戦死し、その後を王子が継ぐことになった。
まだ若い王子は腹に一物を抱えた老人の言葉を鵜呑みにしてしまい、その国の英雄として讃えられていた者を処分することに決めてしまった。
それ自体はあまり珍しい話ではない。
未熟な跡継ぎが王たる資質を養うために失敗を重ねるのは自然なことだ。
だから、王宮に仕える親友にそれを告げられた時も大して驚きはしなかった。ああ、やはりそうなったのか、と。予感はしていた。
今の王に弁明の声は届かない。
だが、こちらとてそんな理不尽に殺されるつもりも毛頭ない。
ならば逃げよう。自分にはこの生き方しかできない。
幸か不幸か、物心ついた時には家族はどこにも居なかった。しかし、自分が姿をくらましてその幇助を問われないよう、忠誠を誓ってくれた部下を裏切る必要があった。
あの、何事にも生真面目だった部下。
自分の娘ほどの年齢の相手に、彼は気を失うまで殴られることも厭(いと)わなかった。
何度も殴打され、痛みを叫ぶのは部下のはずなのに、自分ばかり

が泣いていた。
そして、夜中に門兵が全員居眠りをしている隙を突いて門をくぐった。
寝言と言いはる彼らに独り言の別れと礼を残し、夜の草原へと馬を走らせた。
死神とまで謳われた英雄が、死刑を前にして逃亡。
後ろ指などいくら刺されても痛くも痒くもないが、同じ釜の飯を食った連中との別れはやはり辛かった。
逃走劇は成功したように見えた。自分自身、安心して馬に気を遣う程度の余裕も持ち始めていた。
だが、若い王は早く実績を作りたかったのか、裏切り者の処分に特に力を入れて動いたらしい。
追手は予想よりもずっと早く追いつき、馬を射止められてしまい応戦を余儀なくされた。
戦いには勝利したものの、自分は剣と馬を失い、追手の者も死ぬ間際に愛馬を道連れにした。
結局、自分の足で草原を行くしかなくなったのである。
捕らえられれば裁判もなく処刑されるだろう。あっけないほどに。
生き残るには王国が滅びるか、追手の及ばない他の勢力圏まで逃げ切るしかない。
「――アカシアさん？　どうしたんですか、急に黙って……」
「……カルル」
「はい？」
「頼む。どうしても私は王都から早く離れたいのだ。そのために……この馬を貸して欲しい」
これほど必死に人にものを頼んだのはきっと初めてだ。だが、言葉を濁すカルルに胸の奥が重くなる。
「……頼む」
「……」
そう簡単に頷いてくれるとは思っていなかった。だからといって

手荒な真似をするのは本当に最後の最後にしたい。
そんなことを考えているうちに、ふと疑問が浮かんだ。
逆に、どうして彼は王都を目指すのだろう。理由もなく人の頼みを無下にするような性格には見えない。よほどの目的があるのだろうか。
「……なあ、カル。そういえば聞いていなかったが、君はどうして王都に？」
「――――」
より一層カルルの表情が強張った。それは何か、彼の触れられたくないモノに触れてしまった反応。
「カル？」
「……僕は……」
俯いて服の裾をぎゅっと握り、消え入りそうな声でカルルは言いかけた。だが次第に顔が青ざめ、ふっと。
「カルルっ！」
少年は気を失って倒れてしまった。

奴隷

――くさい。……嫌いなにおいがする。

朝起きて一番初めに抱いた感情は『不快』。昨日も、今日も、明日もずっと。

「いつまで寝てやがるっ！　さっさと羊の世話をしろガキ！」

なにも言い返さない。言い返せないんじゃない。無駄なことをしないだけだ。

「ったく……使えねぇ奴隷だ。たまったもんじゃねぇよ」

愚痴を溢しながら男が馬小屋から消えると、カルルはもそもそと起き上がって背筋を伸ばした。

そして、ため息。

家畜の糞尿の臭いが染み付いた寝床が、今度は仕事場になる。

仕事場と言っても、給金を貰って稼いでいるわけではない。馬車馬のように使われ、怒鳴られ、腹を蹴られ、いつしか夜になっている。

好きでこんなところに居るわけではない。この村は人さらいに遭った子供が連れてこられ、様々な用途の奴隷として取引されてから使役される。

そして自分と同じような境遇の者は皆、目が死んでいる。最初はなんとか脱出しようと頑張るのだが、口数が減り、次第に表情が消えていき、瞳から光が失われて虚ろな目をするようになっていく。

自我を失って本当に家畜と同じになる者。悲観して泣きながら体中を噛んで死のうとする者。

今では見ただけで、その子供があとどれくらいで諦めるかがわかるようになっていた。

誘拐されて七年も生き長らえた奴隷は初めてだと、誰かが話しているのを聞いた。

きっと、自分は運が良かったのだ。

すごく嫌なことをされても、その気持ちを和らげてくれる『拠り所』が自分にはあった。
それのおかげでどんなに辛くても歯を食いしばることが出来た。
このオカリナを胸に抱くだけで、思い出が嫌なものをひと時だけ忘れさせてくれる。
吹くと持っているのが知られるから、毎晩指だけ動かしたりして思い出に浸った。
名前も知らない少女の笑顔。
お互いに吹きあっては笑いあった記憶。
それだけがカルルを認めてくれた。どんなに軽蔑されても、それがあったから聞き流すことができた。
その夜は珍しく、酒に酔った家の主人が鼻歌を歌いながら馬小屋にやってきた。
ろれつが悪く言っていることは半分ほどしか理解できなかったが、どうやらこの家の奴隷は長持ちだから買い替える金がかからなくて羨ましいな、と誰かに言われたそうだ。それと酒の酔いも相まってか「褒めてやろう」などということらしかった。
……なんとくだらない。
最初はあまりの馬鹿馬鹿しさに、呆気に取られて舌の回らない男の話を聞いていた。
だが、ふと気づく。そして短い葛藤のあとに覚悟を決めた。
カルルは立ち上がると両手を繋ぐ枷の鎖を男の首に巻きつけ、交差させながら思い切り締め上げた。　男の反応は鈍く、思ってもみなかったほどに非力だった。
ろくに体を動かすことがなく、よく肥えた首の肉に錆を擦りつけながら鎖が深く巻き付く。
「あ……やめろ、やめ……おっ……やめぇぁ――」
あのふんぞり返って大きく見えていた奴が、実際は自分よりチビの禿げ頭でしかなかった。
――こんな奴に……っ！！

自分の両手首を背負い込み、肩越しに力任せに引き上げる。
カルルが本気を出しきるまでの間、気持ちの悪い静寂があった。
そして、蚊の鳴くような断末魔を耳元で聞くと、腐った木の枝が折れるような感触を得たのだった。

「――っ！」
勢い良く体を起こし、隣にいた誰かに掴みかかっていた。
「はあっ……はあっ……！」
ようやく自分が寝惚けていたことを理解してアカシアの体から手を離した。抜きかけた短剣を収めると彼女は言った。
「かなり、うなされていたぞ。怖い夢を見たんだな」
「夢……？　……いや、……夢じゃない……」
「どうした？」
「……」
忘れることはできるのだろうか。
今までに受けた苦痛はそのうちに薄れていくだろう。だが、一線を越えた事実は決して消えることはなく、記憶の付箋として残り続ける。
「大丈夫だ。何も怖いことなどないぞ」
頭を優しく撫でられた。
「ところで。……君に聞きたいことがある」
ずい、と顔を寄せられて思わず身構える。落ち着いてきた呼吸が別の意味で乱れそうになる。
「ハロッサ、という町を知っているか？」
「――！　……」
知らないわけがない。七年もの苦痛な歳月をそこで過ごしたのだから。
どんな顔をすればいいのか、そして自分は今どんな顔をしていたのか。悲しそうなアカシアの表情に申し訳ない気持ちが溢れてくる。

「……そうか。やはり、そういうことか」
推測が正しかった、とアカシアは声を落とす。
「君が気を失って、介抱しようとして見つけてしまった。その手首の跡は……見覚えがある」
「……」
自分の手首を目でなぞった。外してから間もない鉄の枷の跡はまだはっきりと焼き付いたように赤く痣として残っている。
「君が都へ急ぐ状況も理解した。……だからこそ、頼む。君に降りかかる火の粉は私がすべて払う。だから」
「――わかりました」
「……ん？」
「いいですよ。もう、おまかせします」
「カルル……？」
アカシアに背を向け、荷馬車から降りて夜の草原のしじまの向こうを見据える。
ハロッサから逃げ出したあたりから、薄々わかっていた。
都に帰ったところで、思い出を取り返すことなど出来はしない。ましてや、あの時の少女との再開など夢に妄想もいいところ。
自分が木の枝で叩かれていた間に、少女は様々な経験をして喜怒哀楽を育み、素敵な女性になったのだろう。
あのひと時の幸福感を与えてくれた笑顔すら、実はもうおぼろげにしか思い出せない。

「……？」

オカリナの音色がして、ふり返った。
粗末な荷馬車の上、月明かりに照らされながらオカリナを吹いている者がいる。
それは彼女しかありえないのだが……そうではない、この吹き方を自分は知っているのだ。

――いや、それ以前にこの旋律は……。
一息分ほどの演奏が終わると、彼女はオカリナを唇から離して呟いた。
「……不思議な感覚だ。すっかり忘れていたと思っていたのに、指が憶えている。耳が思い出して、また次の音が頭に浮かんでくる。とても心地が良い」
巧いか下手かではない。
その短い演奏にカルルは涙が溢れていた。
「ああ、……すまんな、話の途中に。懐かしくてつい、手に取ってしまった。――って、おい、どうした？」
鼻声になるのが嫌で、黙って首を横に振る。
「大事な物だったのか……。悪かった」
「違うんです、そうじゃない……」
「では、どうしたと言うんだ？　なぜ泣いている」
「あなたは……その曲をどこで？」
「――曲？　あ、ああ。今のはな？　私が幼いころに、ある少年から教わった曲なんだ」
ぐっ、と胸が詰まる。
そんなまさか。
「変な話をするが……私は戦災孤児でな。両親ともに失って、王都の孤児院で暮らしていたんだ。いつも一人で過ごしているような子供だったよ。同じくらいの年の子ともあまり遊ばないで、いつも形見のオカリナを吹いていたんだ」
戦災孤児。
王都の孤児院。
カルルにも懐かしい言葉だった。
夜中にトイレに起き出して、部屋に戻る途中でさらわれるまでは、カルルもそこで暮らしていた記憶がある。
「それで、私のことをじっと見つめている子供がいたんだ。新しく入ってきた子で、話を聞くとその子も私と似たような境遇だった」

その時はきっと、さぞかしモノ欲しそうな目で彼女のことを見ていたのだろう。オカリナを胸に抱えて警戒された覚えがある。
「聞けばその子も母親がよくオカリナを吹いてくれたらしい。その時にあの子から教わった子守唄、それがいま、私が吹いた曲なんだ」
「……その子とは、それから……？」
「ん、ああ……居なくなったんだ。ある日突然、ぱったりと。迷子では……ないだろうな」
「じゃあ、その子の名前は」
「いや……。思えばなぜ聞かなかったのだろうか。あんなに仲良く……していたのに」
手に持った白い陶製のオカリナを見つめ、アカシアは思い返した。
そうだ、あの時は貸したまま別れて、それであの子は居なくなってしまった。あの時は形見を盗まれたと大泣きしたが……。
そういえばあのオカリナによく似ているなと思い、何となくそれを裏返してみた。
すると、見覚えのある一対の剣の紋章に目を奪われた。
とある貴族が戦での功労に剣の誉れとして王から授かった名誉ある家紋だ。
「……え？」
それを見た瞬間、走馬灯のように記憶の断片が次々と甦った。
転んで危うく割ってしまいかけた時の傷や、それを隠そうと不器用な母が塗ってくれた、少し色の違う白色。
そして確信した。
「これは……」
間違いない。
これはあの時に失くしたオカリナだ。
「それをあの子に返すことだけを考えて、今日までなんとか生きてこれました」
「カルル……」
信じられないという顔でこちらを見つめる騎士は、あの立派な出

で立ちを忘れてしまうほどに幼く見えた。その姿に当時の記憶が重なり、再び涙が滲んできた。
「それはお返しします。何度助けてもらったかわからないけど……もう、無くても大丈夫だから」
「そうか……君はあの時の……あの時の……そうなんだな……？」
頷く。
言葉はなかった。口を開くよりも早く抱きしめられ、言葉が言葉にならなかった。
肩の後ろから声がする。目の前には暗い草原が広がっているだけ。何も見えないが、とても温かく心が安らぐ声だった。
「良かった……生きていた……生きてた……」
「……死んだと思ってましたか」
そう言うと、アカシアは肩を掴んで向き合う姿勢で言った。
「ばか、あんな小さな子供が急にいなくなったりしたら……、そう思ってしまうだろう……ばか」
「そんなに泣かれると……僕も困ります」
「……感情に我慢はしない主義なんでな」
鼻をすすりながら開き直っても様にはならない、とは言わずにおいた。
「そうか……うん、良かった。よし、――寝ようか」
「え？」
背を向けてひとりで荷馬車にもどると、アカシアは半分だけふり向いてバツの悪そうな顔で返事をしてきた。
「いやはやなんというか……恥ずかしくてな。人前で泣いたことなんて本当に孤児院以来なのだ。寝て、今のは忘れてくれるとありがたい」
思ったことをすぐに口に出す――と言えばまあアレだが、ここまで素直に感情を晒す人も珍しいのではないだろうか。案外、中身は昔のままなのかもしれない。

「なんだか想像してたのと違うなぁ……」
しかし、思い出は思い出のまま美しくあればいいではないか。
運命は数奇なものと言う。その一端と納得すればそれまでのこと。
親を失ったこと。誘拐されて売り飛ばされたこと。人を……殺めたこと。
ならば思い出の少女が狼を切り伏せる騎士になっていたくらい、なんということはない。
と、納得することにした。
「何の話だ？」
「いえ。なんでも。それより星が……綺麗ですよ」
「ん？　――ああ、そうだな。まるで降ってくるようだ。すこし怖いくらいに」
「……」
「くあ……おやすみ」
「おやすみなさい」
しかし残念なことにカルルにまどろみが訪れたころにはすでに空は白み始めていて、疲れもろくに取れていないと不機嫌に唸るアカシアには寝惚けて顔に蹴りを入れられた。
気まずそうに荷台で剣の手入れをする騎士という新しい荷物を乗せた荷馬車は向きを反転させ、新しい旅にカルルは手綱を打ったのだった。

おとぎ話

草原の外には、「水の草原」が広がっていると内地の者達は言った。

しかし船乗り達に尋ねると、彼らは内地に「緑の海」が広がっていると答えた。

大昔の、とある冒険家が残した有名な台詞である。彼の偉業を讃える演劇では必ず冒頭にこの言葉が挨拶代わりに語られる。

「海は見たことないけど……似てるんだろうなぁ」

どこまでも緑色の大地の中、そこに川の流れのように敷かれた草の生えない道を荷馬車で行く。

この道を外れると方向を見失ってしまうため、決して離れてはならない。

何も目印のない草原を無闇に歩こうものなら、それは目隠しをして彷徨うのと同義である。すぐに自分が真っ直ぐ歩けているかどうかが疑わしくなり、振り向きでもしようものなら今度は「前」がわからなくなる。

話では海もそんな感じらしい。

大きく違うのは草原には「道」があり、それさえ視界に入れておけば遭難することはないという部分だろう。

「ほんと、誰がこんな道を作ったんですかね？」

ねえ？　と御者台から後ろを振り返るとアカシアの大きな欠伸があった。御者台で馬の手綱を握るカルルからすれば、自称「見張り」の荷台でごろごろするだけのアカシアは暢気（のんき）なものだった。

「ふむ。退屈も過ぎると人は哲学的命題に挑むと言うが……」

「気分転換に、どうです？」

手綱をアカシアに示して言ってみる。もちろん交代してくれるとは期待していないが。

「いや。私はここで怪しい輩を警戒する任があるからな。操舵はカルに専念してほしい」
「警戒、ですか……」
草原の道には分岐こそあるものの、基本は一本道である。
「怪しい輩」が来るとすれば、前か後ろかだけなのだ。時々振り返るだけしていれば、そう気に留めることでもない。
人の真後ろで堂々と爆睡は気が引けるが、不可抗力でのうたた寝なら平気らしい。
見張りに意味がないと気がついていないフリをしているにしては、どうも演技がうますぎる。
ならば本気で警戒しているのか、かなりの天然なのか。
心底どうでもいい推考だが、退屈しのぎにはこのくらいがちょうど良い。
「まあ半分は名目なのだがな。この状況で見張りなんて必要ないのはわかっている。それでも、もう半分は本気さ」
「……と言うと？」
「稀にだが、草原で旅をしていると『出会う』ことがある」
「――ああ、おとぎ話ですね？」
親が子どもを怖がらせるのに使う、草原の悪魔のおとぎ話がある。
「はは。……そうだ、お伽噺さ。誰でも知っている有名な話。その、原作とでも言うかな」
「原作？　あのお化けが、っていう話じゃないんですか？」
「いや。大体は同じだよ。そうさな、これはいつだったか……私が初めての遠征に出た時の話だ」
雲がまばらな青空を見上げ、アカシアが語るのをシアンは背中で聞いていた。

大地のほとんどが草原だとはいえ、地面の土が見えるくらい草の浅いところもあれば、背丈をゆうに超える、それこそ何かが隠れていて急に飛び出してきてもおかしくないような場所もある。

その時は草の丈が腰くらいの、わりと深いところで野営をしていた。
馬車が三台は横に並べるくらい道が太くなっていて、そこに数十名の傭兵が火を囲んで夜を過ごしていた。
夜が更け、全員が雑魚寝をしているのが見渡せる位置にある馬車の上でアカシアも寝そべっていた。
すると、月明かりの下で誰かがむくりと起き上がるのが見えた。
（小便か……？）
ふらふらとおぼつかない足取りで歩くその者は、あと一歩で草原というところで一度立ち止まると雑魚寝の一団を振り返った。
それからやや間があって、また前を向くと草原に足を踏み入れていった。
（道を見失うくらい離れるほど馬鹿じゃあないだろう……）
そう思って瞼を閉じた直後、誰かが声を張り上げた。
「おい！　お前どこまで行くんだ？」
その声に起こされ、草原を歩く男の背中に視線が集まりだす。
「離れすぎだ！　小便くらいその辺で出来るだろう？」
「それとも、何かいいモノでも見つけたか？」
一同に笑い声が響く。草原に現れる美女の悪魔のお伽噺に掛けた冗談だったのだろう。
だがそれも、振り向いた男の一言に皆が凍り付いた。
「お前ら……あれが、見えないのか……？」
蒼白な面持ちでそう言った男を、誰も冗談とは思えなかった。
「じゃあ、あれは……」
と、男は前に視線を戻した。
そしてすぐ、
「わ、うわ――来るな！　離せ、このっ！」
「おいっ！　どうした、戻ってこい！　戻ってくるんだ！」
何もないはずの場所で必死にもがく男に周りの声は届かないらしく、挙句にその男は道に背を向けて奇声を発しながら走って行って

しまった。
「……とまあ、その男が見たのがお伽噺の悪魔かどうかはわからないが、そういうことが実際にあったということだ」
「……」
「どうした？」
「いえ……そういう話は苦手なんです」
「そうだな。私も大の男が悲鳴を上げながら走り去っていったのには恐怖したよ」
そっちかよ、とは言っても仕方ない。
その手の恐怖に対しての耐性が自分にはないだけなのだ。能天気と言えば失礼だが、そういうところは羨ましい。
「その時に具体的に何が起こったのかは理解を越えるが、似たような話を方々でも耳にする。それがお伽噺のそれなのかは置いといても、だ。万が一があるということが言いたかったのだよ」
「……わかりました。それではまた見張りをお願いします」
「まかせてくれ。たとえ悪魔が出ようとも君には触れさせんよ」
そう言われると複雑な気分だった。年上とはいえ女性に守られる立場というのは。
だが実際にアカシアのほうが上手（うわて）なのだからどうしようもない。
事が起きれば今の自分は確実に足手まといだ。
彼女がその気になれば荷馬車を奪って一人で逃げることくらい容易なはず。
（馬鹿だなぁ……）
こういう考えばかり思い付くのは、そういう大人しかいない町で長く過ごし過ぎたからだろう。
「……あと、もう少しでハロッサに着きますよ」
「そうか。それじゃあ一旦、この辺で止めてくれ」
「！　はい」
馬に合図を出すと、数泊遅れて荷馬車が動きを止めた。このままハロッサの門をくぐれば、顔の知れているカルルは簡単に捕まって

しまうのは分かりきっている。
なにか、案でもあるのだろうか。
「このまま行けば君は捕まってしまうからな。一応、考えていたのだ」
「どうするんですか？」
まずは、とアカシアは自分の小さな荷袋を探り出した。はち切れそうなぎゅうぎゅう詰めのそれから引っ張り出したのは一着のローブ。
「君にこれを着てもらう。大きさはまあ、大丈夫だろう」
「え……これは？」
「私もいつまでもこの格好では不便だからな。王都の刻印もそこら中に入っているし。町に着いたらこれに着替えるつもりでいた」
「はあ……」
とりあえず相槌を打ちながら、カルルは茶色い女性用のローブを手に取ってしげしげと見つめた。変装、ということらしい。いや、女装になるのだろうか。
「フードを深く被り、ずっと俯いていてくれればいい。別に気にする者がいても、連れは顔に呪いを受けていると私が言ってやる」
「……。でも、この荷馬車は？　これだってあの村の物なんです。すぐに気付かれますよ」
「この村に来る途中で奴隷のような格好の子供に襲われ、仕方なく切り伏せて奪った。……という筋書きを考えているのだが、どうかな？」
先程の自分の考えが頭をよぎった。
「完璧です。それでいきましょう」
「よし、じゃあさっそく……」
アカシアの手がカルルの胸元のボタンを外しに掛かった。
「いや、まっ……自分で脱ぎますから！」
「怒ることはないだろうに……。ところで君はこれの着方を知っているのか？」

「着たことはないですけど……。被って腰のひもを縛るだけでしょう？」
アカシアは残念そうにため息を吐き、カルルが着替えるのを待った。
そして最後に腰のひもを結び始めた時だった。
「ああ違う、そうじゃないんだ」
期待して待っていたかのように素早くひもをカルルの手から奪う。
「結び方ひとつを取っても流行り廃(すた)りがあるんだ。どんなに世間知らずの田舎の娘でも片結びはしないだろう」
「……そうですね」
世間知らず、という部分が引っかかったが大人しく結び終えるのを見ていた。
「まあ、蝶々結びが無難かな」
形の整った綺麗な結び目に満足したように言い、カルルも彼女の意外な器用さに驚いた。
それから一歩下がるとアカシアはカルルの頭の上から爪先までを無遠慮なまでにじっくりと見つめ、
「ふむ、悪くない。いや……むしろ良い。華奢な体と顔つきが幸いしたな」
妙な視線を肌に受けながら差し出された手鏡を見ると、何ともいえない気分になった。
「とても似合っているぞ」
「……勘弁してください」
「この町娘っぽりならいかに知った顔といえど早々に気づかれることはないだろう。さっさと通り抜けてしまえば大丈夫さ」
「……行きますか」
「ああ。それとカル、これを懐に」
「？」
寝ぼけて掴みかかった時に一瞬だけ見た短剣だった。
「いくらなんでも丸腰ではな。あの長剣よりはこちらのほうが使い

易い」
持ってみると短剣というよりは少し大きめのナイフといった印象だ。懐に携帯するにはこのくらいが良いのかもしれない。
「ありがとうございます。……あの丘の向こうにハロッサが見えるはずです」
頂上に生える木が親指ほどの大きさに見える丘を指差した。あそこの上に立てば、あの忌々しい村を見渡すことができる。
……無事に抜けられるだろうか。
そんな気持ちが顔に出ていたのかもしれない。
「なぁに、多対一も私の得意分野さ」
「得意分野？」
「……いや、例えが悪かった」
バツの悪そうな顔をして訂正した。
「狼より強い人間はさすがにあの村にはいないだろう？」
と笑って見せる。それにはカルルも肩を揺らして頷き、御者台へと移るアカシアに手を差し伸べた。
その時は、丘の向こうに見える空が曇っているのはこれから雨でも降るのだろうと思っていたのだった。

おとぎ話（後書き）

感想を頂いたことでモチベーションが凄まじくあがり、自分でも驚きました。
モチベーションを燃料とすれば私の飛行機はもう低空飛行どころか常におなかが削れているような状態なのでありがたかったです。

救済の名の下に

「何だこれ……」

丘の上から見渡した平原には、確かに存在していたかつての村は無く、代わりに焼け落ちてまだ薄い煙を立ち昇らせている村の跡が残っているだけだった。

近付く毎にその様子は鮮明になり、出入りの門から民家の倉庫まで、村のほぼすべての建物が無残にも焼き落ちている。

カルルは呆然としながら村の中央の広場まで荷馬車を進め、そこでようやくこの惨状が誰によって引き起こされたのかを知ることとなった。

「兵士……？」

鉛色のの甲冑に身を包んだ兵士が十数人、どうやらこれは彼らの仕業と見て間違いないようだ。

「……貴女方は？　先に名乗って貰えますかな」

馬に乗った真鍮色の甲冑を着けた男が言った。ひとりだけ色が違うのは彼が指揮官で、槍を持った残りが部下ということだろう。歩兵の顔は甲冑で見えず、表情がわかるのはその年配の男だけだ。

二人は荷馬車から降り、質問にはアカシアが答えた。

「名はアカシアという。王都アリシルより、特命を受けている。ここを通ったのはその道中だ。貴官らは何者か」

特命とわざわざ口にしたのは彼らも同じアリシルの兵士だと判断したからだろう、とカルルは思った。アカシアの甲冑は少し仕様が違うようだが、見た目の特徴が彼らのと良く似ているのだ。

それを聞いた指揮官らしき男は年相応の柔和な顔で驚いた反応を示した。

「貴女がアカシア殿？　――なるほど、確かに話に聞く通りだが……随分とお若い」

「よく言われる」

そっけなくそれだけ返すと、おっと、と思い出したかのように男が続けた。
「いやはや失礼。私はルイーグ、ルイーグ・コルト。我々もまあ……特命といいますかな。……して、そちらのお嬢さんは」
思わずびくっと肩が跳ねた。それを怯えさせたと勘違いしたのか、ルイーグと名乗った男はわざわざ馬を降りてこちらに歩み寄ってきた。
「おっと……。馬上から挨拶など失礼をお許しください。しかし決して、貴女を怖がらせようというのではありません。どうか、お顔を上げて下さいませんか」
この年でその立場ならもっと高慢な性格を想像するものだが、ルイーグという男の物腰の低さは逆に相手を委縮させてしまうほどだ。別の意味で指揮官向きの人間性と言える。
しかしカルルは慌てて隣のアカシアを小突いて助けを求めた。
「ああ――ルイーグ殿、すまない。彼女は顔を人に見られるが怖いのだ。呪いを受けていてね」
あと数歩のところでルイーグが立ち止まったのがわかった。
「そうですか……それはお気の毒に」
ルイーグは振り返ると焼け焦げた家々を見渡して語り始めた。
「軍属……このような身ではありますが、人の心はまだ残しているつもりです。私はこれまでに赴いてきた地で、未来に傷を負った子供たちを多く見てきました。不幸な子供をひとりでも多く救済しい……それが私の望みなのです。……この村がこんなことになってしまったのは確かに我々のせいに違いありません。我々が役目を果たそうとすれば、必ずそれを邪魔する輩が居ますから。争いは耐えないのす。それでもここのような、余所でさらわれた子供を奴隷として使うような村はすべて潰さなければいけません。若い世代が我々の世代の苦労まで背負うことはないのですから。その世の中が実現するまで、どうか貴女にも強く生きていてほしい」
「ルイーグ隊……聞いたことがある。『救済の兵士』、と名高い？」

「お恥ずかしい。そう言って貰えるだけで――」
「嘘をつくんじゃねぇよっ！！」
瓦礫の陰から飛び出した男がそう叫んだ。すぐさま歩兵に取り押さえられ、地面に組み伏せられて凶器らしき農耕具を取り上げられてもなお、顔だけルイーグに向けて吠え続けた。
「なにが『救済の兵士』だっ！　なにもかも奴隷の子供まで――」
その叫びはルイーグの靴の爪先が男の鼻を蹴り潰す音で途絶えた。
「黙らせろ」
男の口に猿轡が噛まされる。
「ルイーグ殿。これはどういうことか」
アカシアの声にカルルすらぞっとする冷たさが宿る。
それに答えるルイーグの柔和な笑みも先ほどとは違って見えた。
「なーに、逆恨みでわけのわからぬことを叫ぶのはよくあることです」
その視線が見えない取引でも持ちかけているようだったのがカルルにも感じられた。
「……ひとつ、お聞きしたい」
「？　なんでもどうぞ」
「ここで『救済』された子供は？」
「それは……あそこの荷馬車の中に。我々の荷馬車です」
「人数は」
「……ひとりです。かわいそうに、他は皆、彼らの手によって。奪われるくらいなら殺してしまえと、凄惨な光景でした」
ルイーグに指を差され、兵士に縄で縛られた先程の男が暴れた。が、すぐに押さえられ、猿轡のせいで言葉も聞き取れなかった。
ルイーグがそちらを見ている隙にアカシアがカルルにそっと囁いた。
「カルル。君がここを離れる時に居た子供の人数はわかるか？」

「……十三人です」
「そうか」
アカシアは再びルイーグのほうに目を向けて、
「ならば、その亡骸を確認したい。よろしいか？　ルイーグ殿」
「……。……ええ、よろしいでしょう。では私に付いてきてください。――お前達はここで待っていろ」
「はっ」
槍を携えた兵士たちは威勢のいい返事とともに姿勢を正した。
ルイーグの後に続いて歩く途中、アカシアが耳打ちしてきた。
（私から離れるなよ）
「え？」
思わず聞き返したがアカシアはそれを無視してルイーグの後を追った。不穏に感じながらもカルルは少しアカシアに詰めて歩いた。
「子供たちはここで村の者に……助けられなかったのが残念でした」
火の手を受けていないある建物の前に来るとルイーグが立ち止まった。
三人が中へ入るとそこにはただ物のように並べられた、変わり果てた姿の奴隷の子供たちの姿があった。
「ひどい……」
胃からこみ上げてくるのを堪え、カルルは惨状を目に焼き付けた。血の気の引いた幼い顔はすべて知っている。頭が真っ白になって倒れてしまいそうだった。
――それに……。
ここが穀物の倉庫に使われていたことをカルルは知っていたが、なぜ殺される寸前の子供が倉庫に居たのかという理由は思い浮かばなかった。いくら労働力が大事だからといっても食糧と同じ場所に閉じ込めたりはしない。
そういえば、ここに入れられていた穀物の袋も見当たらない。
「どうやら、奴隷用の倉庫としてここが使われていたのでしょう。

我々が踏み込んだ時にはすでに……」
ぞくり、とカルルの肌が粟立った。
アカシアを見るが、彼女は倉庫に足を踏みいれてからずっと横たわった亡骸を慎重に調べていてカルルには目もくれない。
そんな彼女が唐突に声を発した。
「ルイーグ殿よ」
「……なんでしょう」
「たった十人足らずの戦力で、良くこの村を制圧出来たものだ。こんな村では特に抵抗も強かったろうに。おみそれした」
とは言いつつも声色は冷たいどころか棒読みに聞こえる。
感嘆の言葉が意外だったのか、ルイーグはこんなことを口にした。
「いえいえ。ろくに戦闘の経験も武器も持たない者など、どれほど束になっても怖くはありませんよ。農耕具や、刃物ですら山鉈程度でした」
「そうか……」
「もうよろしいですかな？　済んだことは仕方が無いとはいえ、ここにいるのはやはり心苦しい」
アカシアに背を向け、ルイーグが倉庫の扉に手を掛けた時だった。

「ふざけるな……それが気高きアリシルの老兵か」

その声の怒張にカルルは竦んでしまった。
「ほう……なにか失礼でもありましたかな」
「ここにいる子供は全員、そなたらの槍で殺されている。山鉈や農具でこの特有の傷痕はあり得ない」
「……」
ルイーグは何も答えず扉を開け、二人が外に出るのを待った。
それ以外に選択が無く倉庫を出ると、距離を置いて兵士に囲まれていた。
「私とて、かの英雄殿と事を荒げたくはないのです。……わかって

いただけますかな？」
　微笑むルイーグは懐から拳ほどの良く膨らんだ皮袋を取り出し、近づいてきた。
「あの子供たちは、この村の者によって不運にも殺されてしまった。そうですね？」
「ああ、はっきりしたよ」
「それはそれは。良かった」
「切り捨てなければならないアリシルの恥部を見つけることができたのだ。こんなに喜ばしいことはない」
　その言葉に場の空気が凍りつく。
　ルイーグが「おい」と言うと、微動だにしなかった兵士達が一斉に槍を構えた。
「貴女方に……救済の余地はないようだ」
「そうか。もとより追われる身なのでな。――カル、私のそばを離れるな」
　それからカルルには何が起こっているのかわからない時間がしばらく続いた。
　突き出される槍の先端が見えたかと思えば、すでにその切っ先は切り落とされて地面に刺さっていて、足を払われたと思えば頭上を槍の穂先が真横に薙いでいたり。避けるどころか、本当にアカシアのそばに付いているだけで精一杯だった。
　そして気がつけば、立って槍を構えているのもあと三人にまで減っていた。
　兵士は均等に距離を取って三方向からこちらを囲み、一撃を繰り出す隙を狙っている。
　対するアカシアは、肩で呼吸をしながら常に周囲を牽制している。その顔色には余裕が感じられず、もはや気迫だけで立っているように見えた。
　アカシア自身だけならともかく、自分に向けての攻撃も数え切れないほど防いでいたのだ。そんな戦い方をして疲れないわけがない。

傍らでカルルは自らの無力さに歯を喰いしばることしかできなかった。

せめてもの騎士道

戦神アカシア。
どうせ戦意高揚を図った英雄の与太話、そう思っていた。
実際にはそこそこ腕が立つ程度で、すぐにボロが出て力尽きると踏んでいたのは自分だけではないはず。それこそ、端から見ればただの小娘に鎧が付いた程度なのだから。
しかしこれはどういうことか。
手練れが槍で囲んでいたにも関わらず、未だに突くどころか穂先を掠めることすら出来ずにいる。
「――しゃあらっ！」
一人が死角から仕掛けたはずの一撃も、体が躱(かわ)してから首がそちらを振りむくのだ。もはや後ろに目が付いているとしか考えられない。こんな奴は軍格闘術の師範にだっているようなものではない。
（騎士道精神に乗っ取りたいとこだけどな……。まず勝たなきゃいけないもんなぁ。ルイーグ隊長なんて見てるだけだしよ……）
時には不合理なほど徹底した騎士道を貫き、大陸に名を轟かせる騎士に憧れていた。しかしとうとう自分はなり損ねたらしい。
「マルザ、エルム。噴流嵐攻撃だ」
「了解。じゃ、あっしが二の手でいいですか？　バラル副隊長」「了解。このエルムが三の手を務めさせて頂きます」
噴流嵐攻撃とは名前こそ派手だが、要するに打ち合わせがされた連携技である。その時の位置関係で担う役割が決まるのが特徴であり、生き残っているのが小隊の中でも錬度の高いこの二人で助かった。
それにアカシアは小娘まで守っていてくれたおかげでかなり消耗している。これなら肩の上下で呼吸を読むことも容易い。
女騎士が長い息を吐き、また吸い始める――その刹那を狙う。
バラルはアカシアを、マルザはローブの娘を狙って穂先を突き出

した。
正面から仕掛けた一の手、バラルの槍はやはり見切られ、剣で軌道を逸らされた。そこにマルザが二の手を加えて守りを崩す算段だが、今回はローブの娘でアカシアの手を煩わせる。
「カルルっ、どけ！」
予想通りアカシアは小娘を庇った。槍を剣で躱しながら素晴らしい身のこなしで回し蹴りの要領で小娘を蹴り飛ばし、マルザの一閃から守ったのだ。やり方は強引だが感嘆の息が漏れそうになる。
しかしこれは決闘ではない。ただの殺し合いだ。
連撃を防いで態勢を崩したアカシアに必殺の一撃を叩き込むエルムが三手目に控えている。
（さあエルム――お前の錬度なら容易いだろう？）
しかし、その瞬間は訪れなかった。
「っ……」
バラルが目をむけた時、エルムは明らかに混乱していた。
槍を突き出す瞬間のために全神経をアカシアへ集中させていたのだ。そんな彼の目の前に蹴飛ばされた小娘が転がってきて彼の集中をかき乱し、判断を数瞬遅らせた。
ここまで狙ってやったのだとすれば末恐ろしい娘だ。
「――っ、せあぁ！」
気持ちは分かる。が、もう――間に合わないだろう。
体勢を立て直したアカシアはその一閃の突きを紙一重で躱し、代わりに長剣を振り抜いた。
頭と胴の甲冑の隙間、首を確かに刃が通過したのを見た。
（エルム……っ！）
ここで雄叫びの一つでも上げながらこの槍をアカシアに突き出せるのなら、バラルは死神に魂をくれてやってもいいと思った。
（畜生っ……）
それすら叶わないのはこの一度突きだした穂先を引き戻さなくてはならず、その隙が命取りになるからだ。それはマルザも同じで、

もう間に合わないことくらい本人もわかっているはずだ。
――ほら、英雄様がもう剣を振り上げてる。エルムの次はマルザだ。なら俺はあと一発くらいはかませるか。……エルム、マルザ。散っていった部下よ――。
地獄に落ちても皆でまた馬鹿をやろう。
二人目の兵士も膝を折った。残るは自分のみ。目に映る騎士の背景には動かなくなった部下たちが横たわっている。
皆、いい奴らだった。
そしてすまない。最後の最期、自分はお前たちの仇よりも別のものを優先しようとしている。
やはりこれだけは許せなかった。
死を前にし、英雄を目指していたころの自分に後ろめたい気持ちを残したままになるのが怖くなった。
相手が誰であれ――腑に落ちないことには全力で抗わなければ人間は腐ってしまう。
賄賂を断った若き騎士が、それを思い出させてくれた。
「おおおおっ！」
「くっ！」
避けられない攻撃なら刺し違えるまで、と決死の表情を浮かべ剣を構える騎士に胸中で礼を言い、体を反転させる。
残りの人生すべての気力を篭めた、アリシル旗下第一特務ルイーグ隊副隊長、バラルの一投。
最期の槍に相応しい相手をめがけ、槍は投げられた。
「――――」
その槍の穂先が先ほどアカシアによって切り落とされていなかったなら。重心の位置が狂っていなかったなら……確実にそれは心の臓を穿っていたに違いない。
投げられた槍は、折れなかったことが奇跡に思えるほど深く深く標的の背後の壁に突き刺さっていた。
「てめぇが死ねば……よかったんだよ……っ、クソ外道が……！

あの世にてめぇの居場所が
あると思うな……よ……」
投げた直後にアカシアの長剣を受けたバラルは倒れ、その顔は最期までルイーグを睨みつけたままだった。
腰を抜かして無様にしりもちを着くルイーグの背後では、激しく壁に突き刺さった槍がまだ残響に震えていたのだった。

「さあ、貴様で……最後だな」
剣をルイーグに向けてアカシアは声を振り絞った。
彼女の体力が限界に近いのはカルルの目にも明らかであり、それはルイーグとて同じだった。
「ふ、ふん。今の貴様に何ができる？　確かに……部下をやったのは見事だ。だがこれで最期なのは、お前のほうだろう？」
「……」
剣をしきりに握り直しているのはもう手の感覚すら危(あやう)いのかもしれない。
「アカシアさん……」
情けない。自分には励ますことしかできないのか？
この人は女性だぞ？
大して年の変わらない男の自分が守られてどうする？
俺は……。
その時、がくりとアカシアが膝を着き、剣を落とした。
地面に手を着き、苦しそうな呼吸と歪む横顔。
「アカシアさん！？　だ、……――」
大丈夫ですか、などと言えるわけがなかった。どう見ても大丈夫ではない。それに彼女がここまで苦しむことになったのは自分に責任があるのだ。
しっかりして下さい、頑張って下さい。
そんなこと、情けなくて口が裂けても言えるものか。
「どけ、小娘。貴様に用はない。だが邪魔をするというのなら貴様も殺す。――どけ」
ルイーグがすぐそこまで迫っていた。剣先を向けて冷徹な笑みを浮かべる男に返す言葉はない。
だが、隣で跪(ひざまず)いている女性にはこんなことを口走っていた。

「アカシアさん。……あなたの言っていたことが分かった気がします」
恐怖心はとっくに振りきれていた。自分がやらなければならない時が来たのだ。
――逃げることがこんなに恐いだなんて。
「……？　カルル、下がっていろ」
アカシアはなんとか立ち上がろうと踏ん張るが、やはり立てない。体が言うことを聞いてくれないのだ。
さっき最後の兵士を倒した瞬間に安堵してしまったことで疲労感が一気に押し寄せてきた。これは自らの未熟さに他ならないが、そのせいでカルルまで死なせてしまうのは堪えられないことだ。
「……やる気か？　小娘」
しかしカルルはそんなアカシアの思いとは裏腹にルイーグに立ち向かおうとしている。
アカシアや自分のためだけではない。彼らの手に掛けられた奴隷の子供の命はカルルにとって無視できる重さではなく、せめてもの手向けだ。この男だけは生かしておけない。
「そうだ。お前を……殺してやる。罪を数えろ」
ルイーグの眉間に皺が集まる。無言で振り上げられた長剣をカルルは雲でも眺めるようにじっと見上げていた。
「――死ねいっ！」
振り上げた位置から真っ直ぐにカルル目掛けて剣が振り下ろされる。
「カルルっ！」
アカシアが叫んだのが聞こえた。
直後、カルルの真横で空振りしたルイーグがつんのめっていた。
「……っ！？」
カルルの口元が吊り上がる。
――よかった。
困惑するルイーグの表情にカルルは確信を得た。

――自分も戦うことができる。
「この……小娘がぁっ！！」
今度は斜めに薙いでくる。
ルイーグが剣の切っ先が届く前にカルルは後ろへ飛んでいた。
――見える。
槍の時は慣れない前後の動きに対応できず、結局アカシアの足を引っ張ってしまった。
だが、その時からもしかしたらという気はしていた。
ある日は寒空の木の落ち枝で。またある時は家畜を従えるための皮の鞭で。
一度でも避けようものなら、百回悲鳴を上げるまで叩き続けられる。
痛いのが嫌だから、知らず知らずのうちにあまり痛くない箇所をわざと打たせるようになっていた。
その頃にはもう、相手の目線や体の動きから事前に見切ることを体得していた。
「カルル……」
そのカルルの反応と動きにはアカシアですら戸惑っていた。
「どういうことだ……！」
同じように何度も何度も。
相手がどう斬ってくるのかがわかる。
わかれば、避けられる。
感情にまかせて大振りな攻撃を繰り返し続けた結果、ルイーグにも焦りと疲れの色が見え始めていた。
「小娘、貴様……何者だ！？」
唾を飛ばすルイーグを睨み続けたまま、カルルは懐からある物を取り出した。
「俺は……臆病者だよ。それでも、いつかは勇者になって大事な人を守るんだ。――あと、俺は男だクソジジィ」
「なっ……」

アカシアから受け取った短剣を抜き払うと言い捨てた。
「今からアンタをぶっ殺すって言ったんだよ。村の人間はともかく……あの子供達を殺したお前は絶対に許さない！」
「ぬうう……！　生意気な……っ、やれるものならやってみろ！」
飛び掛ってくる男に、以前カルルを痛めつけ弄んだ者たちの記憶が重なる。
――一度でいいから、思いきり刃向ってみたかった。
「死ぃねえぇぇっ！」
「うるさいんだよ……！」

振り下ろしてくるルイーグに対し、カルルは下から切り上げる。
斜めに落ちてくる長剣の軌道を見切り、こちらの短剣の軌道をそれに合流させる。
それは正面から受け止めるのではなく、あくまで掠らせる程度の接触を狙う。そうすれば小さな軽い短剣でも、長剣の軌道を体から逸らすくらいのことは容易いとだろうと咄嗟の反応だった。
「馬鹿なっ……」
言葉はそれが最後だった。
その時にはすでに大振りを外されてよろけたルイーグの脇腹に、カルルの短剣が深く突き刺さっていた。
声にならない断末魔のあと、男は倒れ、そして動かなくなった。

男の服で短剣を拭うと、その櫛状の刃を見つめた。
もう汚れは付いていない。借りものなのだから綺麗にして返さなくては、と無意識の行動だった。
だが、人の命を奪ったようなモノを返されて持ち主は何と思うだろう。それに気づいて、馬鹿らしくなった。
「――すみません」

ようやく立ち上がったアカシアにそれだけ言い、黙った。否、彼女の言葉を待った。
人を殺した。それの受け入れ方について彼女の答えに従おうと思った。
「……カルル」
拒絶か。
軽蔑か。
恐怖か。
それとも、何だろうか。
「よかった……」
抱き留められた。
いくら考えてもそうなる理由はわからなかった。
それでも、もう少しこの温もりに身を任せていたいと感じた。
「けがはないか？　大丈夫か？」
「……けがはありません、大丈夫です」
「そうか……よかった。……では、早くここを出発しよう。王都の追手もだが、この場を誰かに見られるのは避けたい」
するりと背中に回っていたアカシアの手が離れた。
それでも、彼女が歩き出した後もしばらくその感触と残り香はカルルの胸の内を温かく満たしていてくれた。

ソードブレイカー（後書き）

物語の中に出てくるキャラクターたちのイメージをよりはっきりと決めようと思って最近そういう絵を描き始めました。
……でもこれがまた難しいものですね。時間をかけてなんとか描き上げても「……誰だおまえ」てな感じで。
それでも自分で作ったお話に自分で挿絵を付けられるようになったら素敵だと思うんですよね。友人には「人はそれを漫画家と呼ぶのだ」と突っ込まれましたが。
とまあ、そんなことをやってるから本編の更新がスローになってしまうのですが。最低でも一週間に一度の更新を守っていきたいと思う次第であります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6273w/

草原の歌に花言葉を

2011年11月6日02時20分発行